

## 水野仙子と私

根 元 松 江

水野仙子、本名服部貞子。私たちはお貞さんと呼んでいました。須賀川町、当時はまだ市にならず、町立の小学校は尋常四年と高等四年とありまして、八年かゝって修業する卒業する過程でした。

その八年間、ほとんど無欠席で過したお貞さんは、いつも首席を占めて誰れからも親しまれていました。落付いた人で余り高々と笑ったり話したりなどはせずに、しっかりしたおとなしい人柄でした。

八年間一緒にいても仲の良いお友達はその沢山ありません。中に四、五人くらいが本当のお友達らしく、その中で私などは抜け出してあげられた方でした。尋常四年ぐらいの時は、わるさいたずらも、目に付くほど大きくなりませんでした。

古い須賀川の小学校の校庭には、それは／＼古い大木の校垂れ桜がありまして、春になると町一番の早咲きの桜と言われていました。その近くに井戸があり、芭蕉の句碑が立っていました。

元通りに石碑を洗いあげて、とび歩いていたことでしょう。後になって折々思い出して、可笑しさとくすぐったさと、いろ／＼と感じたのは私だけでなく、後になつてお貞さんとこの一件は話に出たものでした。

八年間の課程が終つて卒業後、この学校に裁縫専修学校という名のもとに三年間、そこでお習いました。その頃お貞さんは例の女子文壇に小説をさかんに出して、東京へ進出する準備をしていました。折々、私どもに紅葉山人の弟子になるなどと言っていました。

でも、上京して田山花袋の門に入つた事は後でわかりました。割合に遅く結婚されて間もなく、肺を病み、須賀川の公立病院へ入院され、私も暫くぶりでお会いしましたが、思ったより顔色も良く、大した病気でないやうに見受けました。

枕元の机の上に、セルロイドの裸人形に豆絞りの鉢巻をさせておいたのを見て、私は可笑しくて、やはり昔のお貞さんらしいと思つたものでした。

何んで、あんたの様な丈夫な人が、そんな病氣になつたのと聞きますと、夜おそくまで書いていたのが無理でしたと言っていました。

これが最後だったので、三人の兄の母だった私は、主人の家にお祭り招かれに行っていた時に、不意に、お貞

その句は「世の人の見付けぬ花や軒の栗」の名句、その文学の美しさは子供心にもいつも感じていて、時間のある時は句碑の文字をなぞ／＼したりした事忘れません。

その桜が実になると、黒々とした小粒の実が校庭一面に落ちてはれて、掃いても／＼後から敷き詰めていました。その桜の実に目をつけたのが私共四人位でその中にお貞さんでした。でも拾い集めた実で、たんねんに句碑の文字を染めあげたのですが、終つたところは始業の時間になりましたので、四人は済ました顔をして教室へ入ったとたん、先生の光っている目に会いました。

当時、私どもに先生はかなり恐ろしい存在でしたが、開口一番、前の句碑を染めたものは誰か、手をあげよと言われましたので、真黒な手が四本あがったのは確かでした。

先生はすぐに、前へ出てあの句碑に雑布をかけて洗つて来いと、それは／＼厳しく叱り付けられました。四人はすぐに、小さい手桶の雑布桶を持ち出して黙々と石碑に雑布がけです。

校庭には人ひとりいません。授業中で深閑としていました。一言も言う事はできないし、しゃべる人もなく雑布をかけてしまったころは、授業も終つてカランカランと放課の鐘です。

さんの死去を新聞で見てもどろいたのを覚えています。八年間無欠席で通したお貞さんが、三十三才で他界するとは。一度も無欠席もなくて通した私がまだ生きています。

こんなことがあるのだろうか。あゝ、明治は遠くなりけり、殊に私には遠い遠い彼方に往つた感じですよ。

## 幼な道

丹 藤 秋 羅

母の背に負ふしつていた頃の、幼ない日の想ひ出である。

髪を刈られることの大嫌いだつた私は、家から半道ほどの道程を歩いてゆかねばならぬその道を、駅前の髪床へ母に連れてゆかれるのが何より厭で、その時になると何時も逃げ廻り、果ては泣いて暴れたりして母を手古ざらしたものだ、それでも遂に捕えられ無理矢理負われてしまうと、店に行きつくまで手足をバタ／＼さして泣き止まなかったらしい。

今、考えて見ても、その髪床へ行く道は近道なのだが細く曲りくねつた道の両側には秋など吾亦紅や、女郎花